

猪口孝著「範とすべき藩校教育」読売新聞 2009年10月9日朝刊を読む

1. 日本の大学教育を考えると、徳川時代までさかのぼる人はそう多くありません。しかし、日本の大学教育が混迷している時だからこそ、徳川時代にまで目を配る必要があるのではないのでしょうか。その光と影をしっかりと把握し、21世紀の大学教育をデザインし直す時期にあります。
2. 藩校は、統治エリートを養成する徳川時代の学校です。今の大学教育は、統治エリート以上に、その他全員を含む大衆教育に主眼があります。ここが決定的な違いです。
3. 武士は全人口の約5%。それを300の藩で割り、しかも藩校で学ぶのは若い武士に限られるとすると、各藩校の学生数は百人くらい、多くとも数百人以下だったと思われれます。藩ごとにばらつきはあっても、とても小規模な大学だったのでしょ。
4. 教えることは、漢文古典が基礎でした。日本で初めての中国語辞典を作ったことで有名な幕末の藩主、松平春嶽のように、漢文がしっかりと読み書きできる人はかなり多かったようです。しかも、徳育が劣らず重要な役割を果たしていました。
5. 上杉鷹山で有名な米沢藩の藩校でも、厳しい道德教育が徹底されたようです。米沢藩は中山間地が多く、土地生産性が高くないのに、養うべき官僚の数が過剰でした。そのため、毎日の食事も質素を極めました。
6. 武道を強調する藩校も少なくありませんでした。平和で武士が軟弱にならないようにとの考えからです。こういった科目のほか、藩主を組織の象徴として見る考えも強くなりました。
7. こうした藩校教育から学ぶべき点の第一は、なんといっても読み書きを重視していることです。読み書きはすべての基本です。21世紀でいえば、漢文も捨てがたいですが、やはり日本語と英語を読み書きできるようにしたいものです。
8. 第二は、藩の特性を生かし、反映した教育内容がデザインされていることです。カリキュラムは地方の特質を前面に出しつつも、グローバル化のなかでの今日的状況とうまく結合していくことが必要です。

偏狭な地方主義を避けつつ、世界のなかでの地方の位置づけをしっかりと見据えれば、中央集権対地方分権というややもすれば不毛になりがちな議論に陥らずにすむはずで。